「ための恵み」

エペソ人への手紙３：１－２

September.25.2022

エペソ人への手紙３：１－２（パワポ）

Preface

先週は、３：１の「あなたがたのために、私は囚人となっています」という使徒パウロの言葉について考えましたが、パウロという方は、主イエス様に初めて出会ったその時から、もう既に、ために生きる、誰かのために生きる人生となる事を示されていました。

誰にも負けないほどの神に対する熱心をもって、一生懸命にイエス・キリストを信じる者たちを取っ捕まえては牢獄に送り、殺害してしまおうと躍起になって働いていたパウロ、旧姓サウロは、ダマスコの途上で突然、「サウロ、サウロ、なぜ私を迫害するのか」という天からの主イエス様のお声を聞きました。

そして、パウロが迫害しているクリスチャンたちこそまことの神を信じる者たちであると、イエス・キリストこそ神の御姿なるお方であるということを突如として悟らされてしまいます。

このパウロの経験から、私たち、自分のイメージの中で、自分の願うままに、自分の熱心によって作り上げてしまった神像を神だと思い、神様が仰っている信仰とは違う信仰を追求してしまう見当違いな罪深さを持っているという事も教えられます。

パウロは、この人生を左右する霊的体験が、イエス様との出会いが、その後のパウロの生き方に大転換を起こしていきます。

Part One

主イエス様の天からの生声を眩い光と共に聞くという不思議な霊的体験をしたパウロは、目が見えなくなり、人に手を引いてもらわなければ立って歩くことも出来ない状態へとなってしまいます。

そんなパウロに対して神からのメッセージを伝えるようにと、アナニアという弟子にも主イエス様が現れて、次のような言葉を託されました。

使徒の働き９：１５－１６（パワポ）

パウロは、自分の掲げる人生のモットーや熱心や宗教心を成就する自分自身のために生きるというところから、「わたしの名のために」、つまり、主なる神のために、主イエス様のために生きるという人生における方向の修正を示されました。

じゃあ、神のために、主イエスのために、ここで言う「わたしの名のために」生きるとは何なのか？
クリスチャンたちを迫害するために猪突猛進していたパウロに現れなさった主イエス様が語り掛けた言葉に、その答えがあります。

Part One

使徒の働き９：４－５（パワポ）

この時パウロが迫害をしているのは、クリスチャンたちであって、イエス・キリストではありません。
なのに、イエス様は「サウロ、サウロ、なぜ私を迫害するのか」と語り掛けながら、あたかも「キリスト者一人一人は、わたし自身です」と宣言するかのようにパウロに話されました。

マタイの福音書２５章でも、「このもっとも小さき者にしたことは、わたしにしたことです」と、パウロに対して話されたのと同じようなことをイエス様仰ったことがありましたが、キリスト者一人一人、私たち一人一人、そして人として生まれて来た者たち一人一人のことを、神は神ご自身のことだと仰っているその愛に気付いた者たちがクリスチャンとも言えるでしょう。

つまり、「わたしの名のために生きる」、「わたしの名のために苦しまなければならない」とは、「誰かのために生きる、他者のために生きる、人のために、キリストにあって生きるということ」です。

人のために生きるという事を人間愛的なこととしてと言いましょうか、人道的な、ヒューマニズム的なこととして語られたりしますが、キリストにあってということほど、人間愛に満ちたものはないはずです。
なぜならば、先週も見てきましたようにイエス・キリストの十字架こそ、「人のために」の極致であり、キリストにあってということには、神がお与えになることの出来る最上の霊的祝福が必ずや伴うからです。

だからパウロは、福音に仕える者となりました。
パウロは、この霊的祝福が一人でも多くの人々に届くことこそ、最高の究極の「人のため」、「他者のため」、「誰かのため」であると悟らされ、その悟った福音を宣べ伝えるために生きました。

霊的祝福とはエペソ書１章で見てきましたように、罪ゆえに死んで地獄に落ちなければならなかった運命から、キリストの贖いのために罪赦され、永遠のいのちを与えられキリストとともに天の御国を相続するという神のご計画に入れられることですが、
残念ながら、「この究極の他者のために」という霊的祝福が、世の人々に、ま

たは世が作り出した社会秩序にすんなりとはまることはそうやすやすとはなく、大概反対にあったり、迫害にあったりします。
　もちろん、他者のために、誰かのために、人のためにとは、口先だけで成すものではなく、時にはひざまずいて床を拭き、空腹で渇いた時には食べさせ飲ませ、裸の時に服を着せ、病気をした時に見舞い、牢にいた時に訪ねるという苦しみの時を共にするという人間愛的な行動が伴って然るべきですが、それだけでは、イエス様がパウロに仰った「わたしの名のために生きる、苦しみを通る」ということにはなりません。
　イエス・キリストの救いを証しして初めて、「わたしの名のために生きる」ということになります。

Part Two

　パウロはエペソ書を書いていた時、正に、「わたしの名のために生きる」ということを体現して、キリストの囚人となっていました。
　囚人となる事は恥ずかしいこと、隠しておきたいこと、出来れば自分の経歴から消し去りたいことかもしれません。

　ですが、一つだけ、この囚人となる事が誇れる道があります。
　それは、誰かのためにそうなっている時、誰かへの忠誠と誠実を尽くすためにそうなっている時には、囚人であることが誇りとなります。

　人々は、パウロがイスラエルの囚人なのか、ローマの囚人なのか、なんで囚人となっているのかに関心がありましたが、パウロにとっては、そんなことは関係ありません。
　パウロにとっての関心は、誰のために囚人となっているのかであり、そこに意義を見出していました。
　間違ったことをしている誰かに忠誠を尽くすために囚人となっても誇りを感じる程ですから、ましてや、神のお子のために、救い主のために囚人となっているのですから、なお更です。

　さらに興味深いのは、パウロが以前、一生懸命に取っ捕まえて牢獄にぶち込み殺害していたキリスト者たちと全く同じ境遇に置かれることを通して、ぶち込まれた彼らの思いや信仰、「誰のために」ということを心底理解する場へと導かれていることです。
　そして、その場が、祝福であることに気付かされます。

　取っ捕まえて囚人とし、死刑囚とするという社会的に最大の侮辱と恥辱を味わわせるためにそうしていたことが、捕らえられた当人たちは、それがちっとも侮辱にも恥辱にもならず、むしろ誇りであり、主イエス様ゆえにそうなっているということに喜びを感じ、また自分たちがそうなっているということゆえに、新たに主イエス様を信じる者たちが興されているという、一粒の麦が地に落ちて

死んだらたくさん実がなるという霊的祝福の拡大に喜びを彼らが抱いていたということを、パウロは悟らされていきました。

牢獄にいるとは思えないような言葉を使徒パウロは、エペソ書の始めから最後までずっと述べていきますが、そのうちの１箇所を見てみたいと思います。

エペソ人への手紙１：７－１２（パワポ）

このパウロの言葉から伝わってくるのは何でしょうか？　　喜びです。
「牢獄に繋がれた囚人となってみて、神をほめたたえずにはいられない程の恵みに気付かされる」と、８節では、「神のあらゆる知恵と思慮をもって恵みが溢れている」とまで言います。

囚人となっていることのどこに、恵みが溢れているのでしょうか？
そのどこに、神の知恵と思慮が溢れているのでしょうか？
死刑になる程の囚人として捕まっているわけですから、最悪の状況ではないでしょうか？
でもパウロは、「神のあらゆる知恵と思慮をもって恵みが溢れている」と断言しますが、じゃあ、そんな恵ってどんな恵みなんでしょう？

物事の価値を決める時、時代にも世相にも一切左右されない揺るぎない基準があるとすれば、それは、命に代えられるかどうか、命に代えてもということになるでしょう。
映画やドラマを見ますと、「金でも何でも全部差し出すから、命だけは助けてくれ！」というような場面が出てきますが、私たちの生活においても、この命を守るために勉強し、資格を取り、額に汗して稼ぎ、食べ物を得、ありとあらゆるものを所有していき、その所有した物のほぼすべてがこの命を保つためにあります。

それほどに命は大事なものであるがために、「この人が嘘をついているのかどうか」を見極めるのに最も良い方法は、その人が命を懸けているのかどうか、命に代えてもそれを守り握り続けるのかどうかを見れば、うそがどうかを見極めることが出来ます。
そういう脈絡から見ますと、パウロが、「私は死ぬことを決心いたしました。死んでも大丈夫です。いや、もう既に死んでいます。いやむしろ、キリストゆえに、あなたがたのために死ぬことが益であることを聖霊によって知らされています」と、告白しながら成そうとしている彼の語る福音はうそではないでしょう。

神様が、聖書の語る福音が真理であり、事実であり、最も大切なものであることを私たちにどのように証明なさりたいと思っておられるかと言いますと、私たちが福音ゆえに損をしても、福音ゆえに害を受けても、それを手放すことなく

誇る姿を通して、福音が福音であることを証明なさりたいと思っておられます。

「信じたら直った」、「信じだら富んだ」、「信じたら叶えられた」、「信じてみたら上手くいき、成功し、金持ちになった」ということと、
「死んでも守りたいものがある。そのために死ねと言うならいくらでも死ぬけれども、死ぬからといって手放すことは決してあり得ません。」ということのどちらの方が強く、どちらの方が価値を証明することになりますか？

後者ですね。
後者こそ、聖霊によって与えられる信仰であり、イエス様が、パウロが身を持って示してくれた信仰です。
ですが皆さん、現代のキリスト教は、段々と前者に移行しているようには見えないでしょうか。
「これを与えて下さらなければ、叶えて下さらなければ、癒して下さらなければ信じません。もしくだされば、信じましょう。　信じて差し上げますから、どうぞお出しください。じゃなければ嫌です」ということならば、神社に行ってお参りし、お守り買って、家内安全・五穀豊穣・商売繁盛を祈願することと何が違うでしょうか？

Part Three

使徒パウロは、「命を取られてもいいし、馬鹿にされてもいいし、見世物になっても一向にかまわない。ただ、これだけは譲れないし、手放さない」と言いながら、悲壮感に打ちひしがれている様子は一切なく、もっと先を行きます。
「殺すなら、どうぞ殺してください。父なる神よ、彼らの罪をどうかお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。どうかこの者たちを赦し、慈しみ、救いを、哀れみをお与えください」と、それでも溢れる恵みを喜び、その溢れる喜びが分かち合われるようにと祈るんです。

ここに神様の知恵と思慮があります。
神様は、私たちを霊的祝福に満ちた真理の証人として立てるために、また神の御言葉を私たちの人生に込めるために、先ず第一に私たちに要求されるのが死です。　自分に死ぬことです。
なぜならば、死あってこその復活であり、復活は死ななきゃ体験できないからです。
キリストを信じる信仰は、いつも死から出発し、そして死ねば、恵みが満ちます。

だから、物事、世的な価値基準に照らし合わせて上手くいっている人が神様から愛されている特別な人で、弱く貧しく上手くいかない人は神様から見放されているなんてことは全くもってありません。
むしろ、その条件の整わない中で、正に死のような所で、何ものをも奪うこと

も加えることも出来ない、キリストにある溢れるばかりの恵みに気付き、その恵みを分かち合わずにはいられなくなるところへと、神様は導きなさいます。

弱さを用いられるのが神であられ、ないところからあるようにされるのが神であられ、望めないところに望みを生み出されるのが神様であられます。
そして、それを実に体験する所が、キリストにある牢獄であり、荒野であるわけです。

「ひび割れた水がめ」という話をお聞きになったことがお有りでしょうか？
ひび割れた水がめがある時、主人に、「ご主人様、なぜ、ひび割れた水がめの私を用いなさるのですか？
水を汲みに行く度に水がこぼれてしまうので、私ではなく、他のひび割れていない水がめをお用いになって下さい」と言いました。

するとその主人は、ひび割れた水がめにこう言いました。
「私とあなたで水を汲んで歩いてきた道を振り返ってみなさい。
あなたのひびから漏れた水のおかげで荒れ地に草が息吹き、花を咲かせているではないか。
私は、あなたがひび割れているから用いているのだ。」

キリストにあるならば、まことの神を知るならば、弱さが弱さにはなりません。
牢獄が牢獄にもならなければ、死が死ともなりません。
だから、パウロはこういう風に言うんです。

Part Four

エペソ人への手紙３：１－２（パワポ）

「あなたがたのために、あなたがたのために」と繰り返します。
なぜならば、牢獄という人間的な目から見たら全くもって希望の見えない荒野で悟らされた恵みは、小さな自分の内に留めて置くことなんか出来ないほどに豊かに溢れるものであったからです。

「あなたがたのための囚人、あなたがたのための恵みの務め」と告白しながら、神の与える恵みの終着点は、自分ではないことをパウロは悟り、その悟ったことを私たちに教えてくれます。
つまり、恵みは、頂いて貯め込むものではなく、「あなたのために」、「誰かのために」となった時、恵みが恵みとなるということです。

もし、「私は神様の恵みを受けていない」と思えてしまうならば、それは、恵みの特性を知っていないからかもしれません。
恵みは、あなたのためにとなった時、恵みが恵みとなります。

あなたのためにとなった時、与えられている恵みが溢れていることに気付かされます。

この神の恵みの特性を理解するために、こんな話を神学生の時聞いたことがあります。
高い塩分濃度ゆえに魚などの生物が住めないその名も死海という湖がイスラエルにありますが、死海がなぜ、死海なのか？
それは、水が流れ込んでは来るけれども、水が流れ出て行くことがなく、水分ばかりが蒸発して蒸発しない塩ばかりが溜まって命を育めない湖となったということです。

神様は、イエス・キリストにある恵みの特性を示すために、イスラエルに死海をお造りになったのかなあと思えてしまうほどに、恵みの特性を死海は良く表しています。

神の恵みは、あなたのためにとなった時、恵みとなり、私のために、私のためにとなると恵みが恵みでなくなってしまい、貪欲と裁きと憎しみと満足のない渇望へと変わってしまいます。
だから、この世の中、恵みが溢れているにも関わらず、恵みが無いように感じて仕方がないのです。

Conclusion

使徒パウロは、キリストに出会って恵みを悟りました。
使徒パウロは、キリストにあって霊的祝福の最上を与えられていることを悟りました。
そして、使徒パウロは、その恵みと祝福が自分の内に留まり、溜まっていくためにあるのではなく、むしろ、留め貯めこむと腐り、「あなたのために」となった時に、さらに満ち溢れることを知りました。

もっと言いますと、イエス・キリストのことを求めれば求めるほどに恵みが満ち溢れ、その恵みに押し出されて、その恵みを分かち合う「あなたのための恵み」となっていくことを身をもって知り、実践するように導かれて行きました。

この「ための恵み、あなたのための恵み」が、私たちにも既にあることをイエス様によって気付かされ、実践へと導かれていくことを願います。

お祈りいたしましょう。

祝祷：エペソ書３：２